

＜今日の説教のポイント マタイによる福音書2章13-23節＞  
クリスマスの出来事の後日談。ここから聞ける福音に耳を傾けよう！

### 1 (13-15) 困難は続くが、神様の守りも続く。それを信じて歩む。

エジプトへの逃避行の話ですが、簡潔で、余計な修飾は一切ありません。危機が迫って来た、神様の示しがあった、それに従い難を逃れることができた — このことをマタイは旧約聖書のホセア書11章1節とその後の内容から思い巡らしています。私たちがそうしたいと思います。

### 2 (16-18) ヘロデの幼児虐殺。聞き取るべきは人間の罪と神の約束。

ヘロデ大王が行った幼児虐殺の報告です。「イエス様のために多くの幼児が犠牲になった。ひどいじゃないか」、そう思い巡らす人もいるでしょう。しかし、マタイはそうは思い巡らしていません。なぜでしょうか？ 物事は捉え方一つでどうにでも解釈できます。考えるべきはまず人間の罪であって、神様への不平ではないでしょう。次にマタイが引用しているエレミヤ書31章15節とその後の内容に注目です。そこから、キリストの十字架の死と復活からしっかり考え、現世ご利益ではない、人間の罪を打ち破って下さった神様が約束して下さった将来を、泣くラケルの将来に見つめなければなりませんし、見つめられるのです。

### 3 (19-23) 重要な存在として、ヨセフここに登場！

クリスマス話では影の薄かったヨセフが2度登場しています(13-14, 19-21)。神様が告げられ、それに従う者としてです。ヨセフがここで描かれたような者でなければ、事態はたちどころに混乱し、決断が遅れていたことでしょう。影の薄かったヨセフも、ここで神様が向かわれた重要な存在として登場し、その任に応えたのです。このヨセフの姿を私たちが見倣うべき姿として覚えておきたいと思います。

「彼はナザレ人と呼ばれる」(23)は旧約聖書には見当たりません。「預言者たち」(23)と複数形が使われているので、旧約聖書全体が指示している箇所として、イザヤ書11章1節(若枝:ネゼル)を考えているのではないかとされています。神様が約束されたエッサイの子、ダビデの裔に出る若枝イエス・キリストです。深い深い思い巡らしです。